

妃は陛下の辯を望む

## 登場人物紹介

トーウィン

国王直属の文官。  
レナの侍女に  
思いを寄せている。

リアンカ

妃の一人で、  
伯爵令嬢。  
キツイ性格で、  
他の妃に  
嫌がらせしている。

ベッカ

妃の一人で、  
伯爵令嬢。  
お茶会でレナに  
恥をかかされてから、  
彼女を目の敵に  
している。

ディアナ

妃の一人で、公爵令嬢。  
最有力の正妃候補だが、  
なにやら不名誉な噂が  
流れている……？

アースグラウンド

アストロラ王国の国王。  
前国王夫妻が急死したため、  
若くして即位した。  
その重責のためか、  
やや疑心暗鬼になっている。

レナ

国王の妃の一人で、侯爵令嬢。  
幼い頃、彼に一目惚れしてから、  
いつか力になりたいと  
自分を磨いてきた。

サンカイア

妃の一人で、豪商の娘。  
服のデザインを  
するのが趣味。

私には、十年も前から抱えている愛がある。

けれど私は、それを信じたい。  
だから、永遠の愛なんてないのかもしれない。  
けれど私は、それを信じたい。

永遠の愛を信じるか否か。  
私——レナ・ミリアムは、それはほとんど幻のようなものだと思っている。  
世の中には、生涯ずっと愛し合っている人たちがいるのは知っている。  
だけど貴族として生きていれば、それがどれだけ珍しいことか、進んで知ろうとしなくともわかる。

政略結婚が当たり前の貴族社会では、愛人を囲う者も多いし、愛憎劇の末に殺傷事件を起こすよう人もいる。社交界に入ったばかりの私の耳にも、そういう情報が沢山入ってきていた。

神様の前で永遠の愛を誓つても、その思いが失われるはよくあること。

妃は陛下の幸せを望む

それは敬愛であり、異性に対する愛でもあると私は認識している。

あの方の役に立ちたい。

その一心で知識を身につけ、外見を磨いた。

あの方が私を愛してくれなくてもいいのだ。あの方のためになにかできればいい。

それはただの自己満足。だから、見返りなんて求めない。

初めてあの方に会ったのは、十年前の、あるパーティーのこと。

そこであの方は、泣いていた私にハンカチを差し出してくださった。

初めて彼を見た時、なんて綺麗な人なんだろうと、思わず見惚れてしまつたことを覚えている。

私に微笑みかけて、どうしたんだと聞いてくださった。

まだ子供で、ちょっとしたことで泣いてしまつた私の涙を拭い、私を安心させるような笑みを浮かべてくださった。

その笑顔に、なぜか運命を感じてしまうくらい強く惹かれたのだ。

彼と話すうちに落ち込んでいた気持ちは浮上していて、私の心にはあの方の笑顔と、あの方と交わした些細な会話だけが残つた。

彼にとつては記憶さえ残っていないであろう、本当に小さな出来事。だけど、私はそれだけで單純にも恋に落ちてしまった。

それから、ずっとずっと、あの方が好きだ。もしかしたらこの気持ちは、淡い初恋として消えていくのではないかと思つたこともあるけれど、そうはならなかつた。

いまでも鮮明に思い出せる。幼い頃に出会つた彼のことを……

出会つた頃、王太子だったあの方——アースグラウンド様は、このたび王となつた。

そして私は侯爵家の令嬢として、あの方の後宮に入ることになつてゐる。

あの方の妃の一人になれる。愛するあの方のために、なにができる。

それだけで、私はどうしようもなく幸せだ。

だから私は誓う——

「後宮できつとあの方の力になりますわ!!」

「ようこそおいでくださいました。レナ・ミリアム様」

後宮の門の前で、女官長が頭を下げた。その後ろには、三人の侍女が控えている。

「お出迎えありがとうございます。これからよろしくお願ひしますわ」

私は貴族令嬢らしく挨拶し、につこりと笑いかけた。

私の名前は、レナ・ミリアム。

ミリアム侯爵家の長女で、この国で成人として認められる十六歳になつたばかりだ。

私は今日から、王の妃の一人になつた。

この国の後宮は、普段は閉鎖されている。正妃を決める時にのみ建物が開かれ、そこに各地から妃たちが集められる。そしてその中から、陛下が相応しい者を選ぶという仕組みだ。

先日、陛下の正妃選びが行われるとのお触れがあり、それとともに各地の令嬢たちに妃として後宮に入るよう、勅令ちくれいが下つた。

私もそれに従い、ここにやつてきたというわけだ。

目の前で、女官長がまた深々と頭を下げた。

「こちらこそようしくお願いします、レナ・ミリアム様。ご要望通り、三人の侍女を手配させていただきました。これだけ少人数で大丈夫でしようか」

「ええ。問題ありません」

私の後ろには、実家から連れてきた四人の侍女——チエリ、カアラ、メルディノ、フィーノが控えていた。

この国の貴族の令嬢は、普通は侍女を十五人は連れている。これは、単に身の回りの世話をさせるためだけでなく、その数で自分の権力を誇示するためでもあるからだ。家の爵位が高ければ高いほど、連れている侍女の数も多い。

けれど私は、実家から連れてきた侍女四人と、今日から私付きになつた侍女三人がいれば十分だ。それに、実家から連れてきた侍女たちは信頼できるけれど、後宮から手配された侍女のことは正直信頼できない。私の目的のためにも、新しい侍女の数は少ないほうがよかつた。

私の目的。それは、愛する陛下を幸せにすること。

陛下は、前国王夫妻が事故で急死したことにより王位を継いだ。まだ即位されたばかりで、毎日政務に追われていることだろう。

ご両親である前国王夫妻がお亡くなりになつてから日も浅く、きっと心身ともにお辛いにちがいない。

そんな中、正妃選びまでしなければならない陛下のご負担を、少しでもいいから軽くしたいと

思っている。

あの方に恋をしてからずっと、私はあの方の力になるために様々な努力をしてきた。彼のために行動でできる機会を色々想定して、自分を磨いた。

その成果を活かす時が来たのだ。

私はこの後宮で、きっと陛下の力になつてみせる！

そう心の中で意気込んでいた私に、女官長が三人の侍女を紹介してくれる。  
彼女たちはそれぞれ緊張した面持ちで頭を下げた。

三人とも素直で、一生懸命仕事をしてくれそうな印象だ。私はひとまず安心した。

女官長は、見ている者をほっとさせるような笑みを浮かべていて、好感が持てた。後宮を統括している彼女は、妃たちの住まう部屋の準備、妃に仕える侍女たちの手配や教育といった様々な仕事をしている。また王宮と後宮をつなぐ重要な役割を担つていて、豊富な人脈を持つ。

「お部屋にご案内いたします」

女官長がそう言つて歩き出した。

後宮は王宮と同様、外観も内装も白で統一された美しい建築物だ。王宮の敷地内にあり、王宮の入り口からもつとも遠い位置にあった。

男子禁制の女の園である。一部の特例を除いて、男は入ることすらできない。

妃として後宮に入ると、外部との接触は著しく制限される。手紙は中身を確認され、出入りに

は事前に申請が必要だ。外出の審査はとても厳しく、妃たちはほとんど後宮の外に出ることがない。

そのため、後宮内は妃たちを退屈させないようにと趣向<sup>しづこう</sup>がこらされており、庭園も綺麗<sup>きれい</sup>に整備されていた。たいてい一年もしないうちに正妃と側妃<sup>そくひ</sup>が正式に決まり、他の妃たちは家に帰されるので、こうして工夫してあれば特に不満も出ないのだと聞く。

後宮は四階建てのようで、私は一番上の階の豪華な部屋に通された。

「レナ様には、この睡蓮<sup>すいれん</sup>の間をご用意いたしました。では、私は失礼します」

女官長はそう告げて、その場を辞した。

部屋の名前を聞いて、昔後宮にいた伯母様から聞いた話を思い出した。そのころと変わつてなければ、この部屋は後宮の中で二、三番目に広いはずだ。侯爵家令嬢という私の身分を考えて割り当てられているのだろう。

私は自分に与えられた部屋の中を見回す。

後宮に来る前に、必要な家具や調度品の希望を伝えて、自分好みの部屋に整えてもらつていて。私が事前に運び込むようお願いしていた荷物もきちんと置いてあつた。

部屋の中を見回して満足した私は、椅子<sup>いす</sup>に腰かけて、これからなにをするべきか思考を巡らすことにした。

後宮の<sup>あるじ</sup>主であるアースグラウンド様は、今年二十歳になる。

彼は即位してまだ五ヶ月だけれど、既に正妃や側妃の候補として、それなりの数の令嬢が後宮に入っているはずだ。

この国では、王太子になればいつでも後宮に妃を集められるようになる。けれどたいていは、王位を継いでから正妃を選ぶものだ。

正妃と同時に側妃を選ぶ場合もあれば、生涯側妃を持たない場合もある。側妃が必要になつた時に、また後宮に妃を集めることがあつた。

今回は前王が急に亡くなられたため、陛下が即位されることも慌てて令嬢たちを集めることになつた。

私は陛下のことを心からお慕いしている。どんな形でもいいから陛下のためになりたいと、ずっと折角妃になれたのだから、後宮にいるからこそできることをしようと思っている。

そんな私が、まずするべきことは……

考えがまとまる、私は彼女たちに指示を出す。

「チエリ、カアラ、メル、貴方たちは後宮を見てきてちょうだい」

これは情報収集をお願い、という命令である。彼女たちは十年近い付き合いだから、これだけ言えば私の意図をきちんと理解してくれる。もちろん、私の侍女たちが優秀だというのもあるのだけど。

情報とは武器である。特に女の戦場ともいえる後宮では、どんな些細な情報でも必要だ。後宮に入る前にも情報収集をしてみたけれど、外から後宮内の事情を探るのは簡単なことではなかつた。後宮が開いてまだ日が浅いのもあって、詳しい情報は集められていない。

私が知つているのは、昔後宮に入っていた伯母様から聞いた話や、噂話ぐらいだ。

なにをするにしても、まず後宮の現状を把握しなければ。

「わかりました。レナ様」

「行つてまいります。レナ様」

「では、レナ様のことを頼みますよ。フィーノ」

三人はすぐさまそう言った。

「ええ、レナ様のことは任せました」

お留守番のフィーノは私の傍に立ち、満面の笑みでうなずく。フィーノはいつもにこにこしている陽だまりのような子だ。背が高くて、力持ちで、だけど女性らしい。藍色の髪を腰まで伸ばしていく、夜色の瞳を持つている。

彼女がうなずいたのを合図に、チエリたちは部屋を出ていった。

「それから、誰か二人でディアナ様のもとへ手紙を届けてください。手紙はいまから書きますわ」

「は、はい」

「わかりました」

侍女たちは緊張した様子で答えた。

手紙を届けるのに一人で行かせるのは、不測の事態に備えてのことだ。

後宮は様々な陰謀が渦巻く場所で、ライバルを排除しようと妃同士で嫌がらせし合うのは当たり前。酷い時には暗殺事件なども起きるのだ。

後宮に入つてすぐになにかを仕掛けられることはないとと思うけど、手紙を奪われるくらいのことはあるかもしれない。実家から連れてきた侍女たちならばそういうことにも対処できるけれど、この子たちでは難しいだろう。

私が手紙を出したい相手——ディアナ様は、王家とつながりのある公爵家の令嬢だ。先代国王の弟君の娘で、陛下の幼馴染もある。

彼女の実家であるゴートエア公爵家は、陛下からの信頼が厚い。若くして王位を継いだ陛下の後ろ盾になり、足固めを手伝っている。

私が陛下の役に立つためには、ディアナ様と良好な関係を築いておくべきだろう。

それに、彼女は後宮で一番地位の高い方だ。だから私から挨拶を申し出るのは当然のことだ。逆に他の妃たちは私よりも地位が低いので、向こうから挨拶しに来てもらわなければならない。こちらから<sup>おもむ</sup>けば、私が舐められる原因になる。そんな事態はごめんだ。陛下のために行動するのが難しくなってしまう。

「あの、私はなにをすればいいのでしょうか」

用を言いつけなかつた侍女が口を開いた。そんな彼女に微笑んでお願いする。

「それじゃあ、手紙を書くための紙とペンを用意してもらえるかしら」

「はい、わかりました」

仕事を頼むと、彼女は嬉しそうに笑つた。

持つてきてもらつた紙に、簡単な挨拶と、お茶をご一緒にしたい旨を書いた。マナーとして、ディアナ様を褒めたたえる言葉ももちろん書く。

私は社交界デビューしたばかりで、いま後宮にいる妃たちとは直接話したことがない。だからディアナ様と会うのも初めてだつた。

陛下の幼馴染<sup>おさななじみ</sup>に会えるのだとと思うと心が弾む。

思わず笑みを零<sup>こぼ</sup>したら、フィーノに「落ち着いてください」と小声で言われた。

手紙を書き上げると、侍女の二人に渡す。それを届けてもらつてある間に、フィーノにお茶とお菓子を用意してもらつた。

その後、二人が帰つてきてディアナ様からの返事を渡してくれた。その手紙には、明日の午後一時にディアナ様の部屋でお茶するのはどうか、といったことが書いてある。

明日ディアナ様に会いに行くなら、その準備をしなければならない。その他にすべきなのは、チエリたちが持つてくる情報をまとめることと、こちらに挨拶に来る妃たちの対応だ。

そう思つていたら、早速面会を申し込む手紙が届き始めた。今日中に彼女たちと会えるように、すぐに返事を出す。

しばらくすると、部屋をノックする音が聞こえた。フィーノが扉を開けると、妃の一人が入つてくる。

「レナ・ミリアム様、これからよろしくお願ひします」

「ええ、よろしくお願ひします」

挨拶にやつてくる妃たちの本心なんてわからない。ただ、事務的なやり取りを交わす。

そうして他の妃たちとの面会を終えた頃、チエリたちが帰ってきた。

「レナ様、後宮内を見て回つてきましたわ」

「お疲れ様」

戻つてきた侍女たちに労いの言葉をかけると、新しい侍女三人に言つた。<sup>ねぎわい</sup>

「貴方たちはこれを片づけてください」

彼女たちを部屋から出でていかせるため、お茶の片づけを命じる。三人はいい子たちに見えるけれど、まだ信用はできない。

彼女たちが出ていったのを確認して、私は帰つてきたばかりの三人に指示を出す。

「まず、カアラは後宮の見取り図を描いてくれる？」

「はい。了解しました。レナ様」

彼女はうなずいて作業を始めた。

「じゃあ、他の二人は後宮内で集めた情報を教えてね」

「はい、レナ様」

「わかりました。レナ様」

チエリとメルは嬉しそうに笑つて返事をすると、私に向かつて報告を始めた。

「まずは、レナ様が面会なさいますディアナ・ゴートニア公爵令嬢についての情報を、最優先で集めてきました」

そう言つたのはチエリである。<sup>しんく</sup>紅の髪を一つに結んでいて、目の色は私と同じ茶色。私より一つ年上で、頼りになる侍女だ。

続いてメルが、ディアナ様について語ってくれる。

「ディアナ様の様子をこつそりうかがつてきたのですが、素晴らしい方に思えましたわ。社交界での評判通り美しく、それでいてできた方ですね。侍女への気配りもきちんとなさっていましたわ」

メルは私より四つ年上で、濃い茶色の髪を二つに結んでいる眞面目な子。

そんなメルの言葉に、チエリもうんうんとうなずいて言つた。

「他の侍女達からの評判もよかつたですわ。のような方に仕える侍女たちは幸せでしょう。あ、もちろん、レナ様に仕えるほうが私にとっては幸せですわ！」

「私もですわ。可愛いレナ様の傍に控え、お守りすることができて嬉しく思いますわ」

彼女たちは優秀で、私の欲しい情報をきちんと届けてくれる。でも、報告の際にこうして脱線して、私の話になることがあった。『可愛い』なんて主に言う言葉ではないけれど、彼女たちは幼い頃から一緒に育つてきることもあり、いつもこの調子なのだ。

相変わらずの様子に、私は笑って咎める。

「もう、私のことはいいから報告を続けてちょうだい。二人が私のことをそんな風に言つてくれるのには嬉しいけれど、いまは報告を聞きたいわ」

彼女たちのまっすぐな思いは心地よくて好きだ。両親や、お兄様が私に向けてくれるような、家族愛にも似た愛情を持つてくれて嬉しい。

私だって、侍女たちのことが大好きだ。血つながりはないけれど、私にとつて家族のような存在。だから後宮に彼女たちがついてきてくれて、本当に心強い。

「はつ、すみません。レナ様」

「すみません、続きを報告させていただきます」

二人はそう言つて、報告に戻る。

「ディアナ様は陛下の幼馴染おさななじみで仲が良いということでしたら、調べてみたところ、陛下はディアナ様のもとへは通われていないようです」

「陛下が通つていない？」

「そうなのです。他の妃たちのもとには、後宮入りした日に必ず訪れていらっしゃるようですが、

『ディアナ様のもとには一度も訪れていないとか』

私はそれを聞いて驚いた。

この国では、後宮に多くの令嬢を妃として招く。そして集めた妃の中から、正妃にする者を選ぶのだが、その過程で、妃たちと体の関係を持つのが通例だ。

正妃が決まる前に誰かが妊娠すれば、その妃は正妃か側妃そくひになる。陛下が望めば妃を降嫁させ、子供だけを王宮に置くこともあるけれど、そういうことはあまりない。

ちなみに、正妃や側妃そくひに選ばれなかつた妃は家に帰されるが、それは令嬢たちにとつて不利益にはならない。処女ではなくなつても、高貴な血の流れる王族の手がついていることは逆に名誉なこととされている。

だから、一度も陛下のお渡りがないということは、ディアナ様の評判を傷つける。

それは陛下もディアナ様もわかっているだろう。

恋愛感情があるかないかは別として、ディアナ様と陛下の仲が良いことは、社交界でもよく噂になつてゐる。だから、陛下にとつてディアナ様は、共に過ごしていく居心地のいい相手なのだろうと思つていた。

ところが、陛下はディアナ様のもとへ通つていないと。なにか理由があるのだろうか。

その後の侍女の話によると、陛下は王位を継いで間もないこともあり、後宮の管理までは手が回っていないようだつた。とはいゝ、妃たちの実家に配慮して、夜に彼女たちのもとを訪れてはいるそ�だ。

それが本当だとすると、ますますおかしい。陛下が理由もなしに幼馴染おさななじみであるディアナ様の評判を傷つけることはないはずだ。

とはいゝ、私は陛下と親しいわけではない。公式の場でお会いする時以外は大して接点もない。そんな私が勝手に決めつけるのは、陛下に対して失礼だろう。

そのことについては詳しく調べていきましょう。なにか理由があると思うのよ。だから、よろしくね」

「はい、もちろんです。レナ様」

「レナ様のためなら頑張つて調べてきますわ」

「ありがとう。じゃあ、他の方々の情報もくださる?」

そう言うと、彼女たちは他の妃について報告してくれた。

現在後宮入りしているのは、私とディアナ様以外に豪商の娘が一人、伯爵令嬢が二人、子爵令嬢が三人、男爵令嬢が三人だ。

後宮に入るには、いくつか条件がある。

一つは、それなりの身分であること。実際に後宮に入るのは貴族の娘がほとんどなのだが、中に

は豪商のように平民ながら力のある家の娘が妃となるケースもある。

二つ目は、婚約者や配偶者がいないこと。歴史を振り返れば、婚約者や配偶者のいる女性に目をつけた王が、無理やり後宮に召し上げたこともあるそうだが、近年はあまりない。

三つ目は、陛下と年齢が近いこと。陛下と歳が離れすぎていると、正妃に適さないと見なされるのだ。歳が近くても陛下より年上の令嬢はほとんどが結婚しているため、今回集められた妃はある方より年下の娘ばかりだ。

これらの条件に合致する令嬢には、後宮に入るよう勅令ちよくれいが下る。

そして、準備が整つた者から順に後宮入りしていく。

「伯爵令嬢であるリアンカ様とベッカ様は、互いに敵対しているという話です。なんでも、ディアナ様が正妃になることはないと馬鹿にしているようで、二人で正妃の座を競あざわらっているみたいですね。互いに相手を排除しようと動いているようです。彼女たちは他の妃へのいじめも行つていると聞きました」

メルがそう言った。

「公爵令嬢で、陛下の幼馴染おさななじみもある方を馬鹿にするなんて、愚かね」

正直、そんな感想を抱いてしまった。陛下のお渡りがないとはいえ、ディアナ様は社交界で非常に評判のいい公爵令嬢だ。美しく、気品に溢れた完璧な方を、たつたそれだけのことで見下すなんて浅はかだと私は思う。

チエリたちの報告によれば、子爵家や男爵家の妃たちは比較的静かに過ごしているらしい。中には、自身が正妃になるなんてありえないと考えている者もいるようだ。そういう妃たちは後宮内で目立たず過ごしつつ、お互いに交流しているという。後宮で得たつながりは、ここを出てからも役に立つことが多いからだ。

そして現状、陛下には特に気に入っている妃はいないらしい。

妃が全員揃っていない段階で正妃を選ぶことはできないから、まだ様子見しているのだろうか。もう陛下の心を射止めた妃がいる可能性はあるが、その場合も表向きはきちんと全員に接してから決められるはずだ。

そんな中でやるべきことは……

「伯爵家のお二人が馬鹿な真似をしないように、事前に対処する必要があるわね。お忙しい陛下の手を後宮のごたごたで煩わせるのは、できる限り避けたいわ」

「火種になりそうな伯爵令嬢の二人には、目を光させておくべきだ。

『ティアナ様に関しては、向こうに悟られない程度に探つてちょうどいい。難しいかも知れないけれど、陛下が彼女のあとへ通わない理由を知つておいたほうが動きやすいもの』

そしてなにより、陛下のことを知らなければ。

「陛下の好みや、どの妃に興味を持つておられるのかも探つてほしいわ」

国王の結婚ともなれば、政治的メリットが優先され、個人的な感情はあまり考慮されない。最終

的な正妃の決定権を持つているのは陛下だけど、実際には政治的な力関係や、有力貴族の意向が強く影響する。そのため、一般的に正妃として認められるのは、伯爵家以上の地位を持つ妃だ。

けれど私は、身分にかかわらず、陛下が心から愛する方に正妃になつてほしいと思う。

人を愛しいと思う幸せは、他の何にも代えがたく、きっと陛下の人生を豊かにしてくれるだろう。

陛下をそんな風に幸せにできる女性が、の方を傍で支えられるような、賢くて能力の高い妃であれば一番いい。

私は侯爵令嬢だから、正妃になれるだけの身分ではある。けれど陛下が私を愛してくださる未来など想像できない。いくら身分があつても、陛下が私を望んでくださるなんて、そんな都合のいいことが起こることは思えない。

私は陛下が幸せであればいいのだ。

「レナ様、後宮の見取り図を描き終えました。それと考え込むのは結構ですが、新しい侍女たちがもうすぐ戻つてくるでしょうし、なにより初夜の準備をしなければなりません」

「え？」

「ですから、初夜ですわ、レナ様。ティアナ様は例外ですが、他の妃たちが後宮入りした初日には、陛下がその妃のもとを訪れておられます。本日、レナ様のあとへ陛下がお渡りになるのは間違いないでしよう」

カララから告げられた事実に、私は固まつた。

「……あああ、忘れてたわ！」

思わずそう叫んで、慌てて椅子から立ち上がる。

「そ、そうだったわ。私も今日後宮入りしたんだから、よっぽどのことがない限り、あの方がおいでになるのよ……」

あの方の妃になれたことがどうしようもなく嬉しくて、どうすれば役に立てるだろうと計画ばかり立てているうちに、すっかりそのことを忘れていた。

なんということ……。私馬鹿だわ。そんな重要なことを忘れるなんてつ！自分で恥ずかしくなってしまう。

「レナ様つたら、お渡りのことは頭になかったのですわね」

「ど、どうしよう。あの方が私のもとへいらっしゃるだなんて……。それって前に勉強したような、男女の営みをするんでしょう……？」

貴族の令嬢として、子供の作り方については習っている。男女の営みがどういう風に行われるかも知っている。それでも……好きな人とそういう行為をするとなつたら、緊張するのは当たり前でしょ？

だ、だつてあの方が私に話しかけて、私に触れて、そういう営みをするだなんて……考えただけで、もうどうしたらしいかわからなくなる。そもそも教育を受けているとはいっても、上手くできるかどうかわからないし……

「そうです。本日、陛下とレナ様は男女の営みをするのです。戸惑う姿も可愛らしいですが、隙を見せるのは私たちの前だけにしてくださいね？」

「わかっているわよ、カアラ。それより私に変なところはないわよね？」

私はおそるおそる四人に向かって問いかける。

陛下を好きになつてから、できる限り外見を磨いたつもりだ。肌の手入れや髪の手入れは毎日しているし、流行にも乗り遅れないようにしてきた。

でも、あの方にじっくり見られても大丈夫なのか、今更ながら、その……初夜を思うと不安になつてきたのだ。

「安心してください。レナ様は十分綺麗で可愛いですわ」

くすくす笑つてチエリが言う。

「それに、陛下がお越しになる前に、私たちがレナ様の体をきつちり磨いて差し上げますから」

「陛下にお気に召していただけるよう、レナ様をより魅力的に見せる夜着も用意いたしましたわ」

レナ様はただ習った通りになさればよろしいのです！」

自信を持ってください、とフィーノが励ましてくれる。

「ええ、私、陛下から嫌われないよう頑張るわ！」

後宮入りして初めての夜は重要だ。もし失敗して陛下に嫌われるなんてことになつたら、どうし

ようもなく落ち込んでしまう。

なにかやらかしてしまつたらどうしましよう……

心配だけど、女は度胸よ！ やれるだけやつてみせるわ。

そう意気込んだ私は、部屋に戻ってきた三人も含めた七人の侍女たちにしつかり体を洗われ、身支度を整えてもらつたのだった。

もし愛する人がいたとして、その人と二人きりで会話ができる、触れ合える。

それを想像した時、人はどんな反応をするだろうか。照れるだろうか、心躍るだろうか。その機会に相手の心を手に入れようと/orするだろうか。それは人それぞれだと思う。

そして、私の場合は――

「ようこそおいでくださいました。陛下」

あてがわれたばかりの自室で、私は胸の高鳴りを抑えながら、陛下――アースグラウンド様を嫌われないように初夜を遂げようと、完璧な妃として振る舞いつつ、扉から入ってきたアースグラウンド様を見る。

私の心強い味方である侍女たちは、部屋の外で待機している。いま、この場には私と陛下だけだ。夜空を思い出させるような漆黒の髪は、相変わらず美しかった。

この国に黒髪の人はあまりいない。昔、黒眼と黒髪を持つ珍しい女性を妃に迎えた王がいて、陛下の黒髪はその遺伝なのだと聞く。

そして、鋭く細められた青色の目もとつても美しい。王族として生まれ、王となつた彼の仕草は一つひとつが洗練されている。陛下を愛している私は、余計にその姿に魅了される。

だつて、いまこうして見ているだけで、胸いっぱいにときめきが広がるのだ。

「ああ」

陛下はただうなずいて、私を見つめる。他には一言も喋らず、なにも感じていないような態度で私に近づいてきた。

初めて会つた時、陛下の雰囲気はもつと優しかつた。けれどいまは、あの時の穏やかな笑みの代わりに、冷めた表情を浮かべている。

人伝てに聞いた話だけれど、彼は王太子として過ごすうちに簡単に人を信用しなくなり、人に対して冷たくなつていつたという。この國のただ一人の王位継承者というのは、それだけ人を疑わなければならぬ立場なのだろう。

そんな冷徹な態度にさえ、私の鼓動は速まる。

黒色のレースがついた夜着に身を包んだ私は、どうしようもなく緊張していた。恥ずかしくて、思わずうつむいてしまう。

だ、だつて陛下に見つめられてるのよ。あの陛下が、大好きな陛下が私を見てると思うと、もう

どうしたらしいかわからなくなってしまう。

それに、いま私が着ている夜着は、薄くて露出が多い。チエリは『レナ様はスタイルがよろしいので、自信を持つて着てください』なんて言つてたけど、それでも恥ずかしいに決まつてるでしょう！

今までずっと陛下一筋だから、親しい男性なんてお父様とお兄様と、後は幼馴染くらい。

私は男性に免疫がないのだ。こんな格好で男性の前に、それも昔から恋い焦がれていた陛下の前に出るだなんて……

でも陛下に迷惑をかけたくない。だから緊張する心を必死に落ち着かせて、笑みを浮かべたまま陛下を見た。

すると、陛下を見返す形になつて、その……陛下と目が合つてしまつた。

たつたそれだけで、私の平常心はどこかへ行つてしまつた。

鼓動も驚くほど激しくなつた。私の胸をこんなに高鳴らせ、こんな気持ちにさせるのは、この世で陛下だけだ。

陛下が私のほうに近づいてくる。そして私の手を取り、ベッドへと連れていき——そのまま押し倒した。

緊張しすぎてなにもできない私に、陛下がゆっくりと覆いかぶさつてくる。  
すぐ目の前に陛下の美しい顔があつた。その青い瞳に見つめられるだけで、頭の芯がしごれたよ



うにぼうつとなる。

そうしてただ見惚れないと……口づけをされた。

他の妃にもしているのだろうけれど、陛下にファーストキスを捧げられたことが私は嬉しかった。唇が触れた一瞬で、心臓が破裂するのではないかというぐらい、バクバクした。

その気持ちを表に出さないように、貴族の令嬢としての笑みを浮かべる。他の令嬢たちが夜にどうしているかなんてわからないけど、大体こんな感じだろうと想像力を働かせて同じように振る舞おうとした。

ああ、もう、本当にこの人が好きだ。好きで好きでたまらなくて胸が熱い。そんな溢れんばかりの気持ちは悟らせないようにしなければ。

私は陛下の前では、故意に仮面をかぶっていた。だつて素のままでいたら、私は嬉しくてだらしない顔をしてしまう。そんな情けない姿、見せたくない。

一言も交わさないまま、夜着を脱がされていく。内心では恥ずかしくて、自分に変なところがないかと不安になつてもいたけれど、絶対に表に出さないようにした。

そんな私に陛下が触れる。

そうして、その……陛下とつながつたのだ。

初めてだつたから緊張したし、怖かつた。

だけど、それよりも幸せな気持ちが胸いっぱいに広がつていた。

だつてずっと恋い焦がれていた陛下の顔を、間近で見られたのだ。その瞳に見つめられて、その手に触れてもらえた。

政略結婚が当たり前の貴族社会で、好きな人の妃になることができた。そして愛はなくとも、こうして触れてもらえる。これほど幸せなことはないと思う。

陛下は私のことを、妃の一人としてしか認識していないんだろう。

彼にとって妃のもとへ通うのは、きっとただの義務なのだ。

陛下は好きでもない女性を抱かなければならぬ。私がもし男だつたら、そんなの嫌だ。  
彼も進んでその義務を果たしたいわけではないのだと、その顔や態度を見ればわかる。煩わしいとさえ思つているかもしれない。

だから私は、できる限り陛下の手を煩わせない妃になろう。陛下と過ごす夜の間、陛下に安らぎを……というのは無理かもしれないが、せめて陛下の負担にならないように務めたい。

そうして精一杯頑張つて、気づけば朝だつた。

目が覚めた時には、もちろん陛下はいなかつた。

陛下と一夜を過ごせたなんて夢のようだけれど、確かに感じる腰の痛みが、それを現実だと私に実感させる。

「……私、陛下に抱かれたんだわ」

そう口にしたと同時にぱつと顔が熱くなつた。昨夜のことを思い出して、枕に顔を埋める。

陛下がさつきまでここにいたのだと、ここであの方とそういう行為をしたのだと、考えれば

考えるほど嬉しさと恥ずかしさが胸に広がつた。

昨夜はあの方に嫌われないようにと必死で、そういう感情を全部胸にしまい込んでいた。それが

一気に溢れ出して、どうしていいかわからない。

もう死んでもいいと思うくらい幸せ。いや、やっぱり死んでは駄目。死んでしまつたら、あの方

のために、なにもできなくなつてしまふ。枕に顔を埋めて足をばたばたさせる。

「レナ様、おはようございます。……つて、なにをしていらっしゃるのですか？」

私が恥ずかしさと幸福感に身悶えていると、部屋に入つてきたカガラに呆れた声を出されてしまつた。

その後、他の侍女たちも入つてきたので、恥ずかしさと幸せを胸の内にしまつた。そして体を綺麗にしてもらつて、新しい衣装を着付けてもらう。ディアナ様と会うためだ。

さて、体のだるさは感じるけれど、気合いを入れましよう。

「ごきげんよう、ディアナ様。昨日後宮に入りました、レナ・ミリアムと申します。これからよろしくお願ひしますわ」

昼の一時に、私はディアナ様のもとを訪れた。実家から連れてきた侍女のうち、三人を伴つてい

る。他の侍女たちには、別の用事を頼んであつた。

「ようこそおいでくださいました、レナ様。どうぞ、こちらにおかけになつてください」

ディアナ様はにこやかに微笑んで、椅子に腰かけたまま私を迎えた。その綺麗な笑みには、とても好感が持てる。

同性の私から見ても、ディアナ様は美しい方だ。腰まで伸びた長い髪はまばゆいばかりの銀色で、瞳の色はルビーのように煌めく赤。

胸が大きいのに、腰は驚くほど細く、ドレスを着っていてもそのスタイルのよさがわかる。胸元の開いた紺色のドレスは、ディアナ様の美しさを強調していた。

こんな美しい方と知り合えるなんて、本当に嬉しい。

「失礼しますわ」

私はそう告げて、ディアナ様の向かいの椅子に腰かけた。

ディアナ様の部屋は、この後宮で唯一の公爵令嬢に相応しく、広くて華やかだ。

彼女の後ろには十人ほどの侍女が控えている。私よりは多いけれど、公爵令嬢としては少ないほうだった。

私は向かいのディアナ様を見る。ここからが肝心だ。

侮られないよう、それでいて嫌われないように。彼女を敵にまわしたくはない。

私は慎重に口を開いた。

「こうして一人でお会いするのは初めてですね。社交界でも有名なディアナ様とお話しできることが嬉しいと思いますわ」

「そうですわね。レナ様とお話しできて、私も嬉しいですわ」

私もディアナ様も笑みを浮かべている。でもこれは、貴族としての**処世術**。貴族なんて笑顔の裏でなにを考えているかわからないものだ。

だから、私は目の前で笑うディアナ様のことも、まだ信用はしていない。

でも、陛下の**幼馴染**である彼女がどんな人間なのか、私はちゃんと知りたい。そして仲良くなれたら嬉しいし、ディアナ様から陛下の話を聞けたら、とも思う。

ディアナ様付きの侍女が、私たちの前にカップを置く。テーブルの中央には、お菓子の入った皿も置かれた。

私はカップを取り上げて紅茶を口に含む。

「あら、これはダークス領のものですわね」

私がそうつぶやくと、ディアナ様が驚いたように言つた。

「まあ、わかりますの？」

「ええ、もちろんですわ」

私はこの国のことひたすら学んできた。歴史や制度だけではなく、各地の特産物などについてもだ。

ディアナ様が出してくださいた紅茶は、彼女の実家が治めるゴートニア領の隣、ダークス領で生産されているものである。

紅茶は、生産地によって茶葉の味が異なるのだ。

私は有名な紅茶を片つ端から取り寄せて味わい、その違いがきちんとわかるようにしている。おそらく、これはディアナ様が実家から持ってきたものなのだろう。

「レナ様は紅茶にお詳しいのですね」

「少々嗜む程度ですわ。それよりディアナ様のほうがよくご存知なのでは？」

「そんなことありませんわ。ただ好きなだけですわよ」

しばらくそんな会話が続く。互いにまだ心を許していない者同士、当たり障りのない会話だ。もちろん、本心を口にしてはいるけれど、相手の気分を害さないように言葉を選んでいる。

私はまた紅茶を口にし、お菓子に手を伸ばしながら、ふと視線を本棚に向かた。そしてその中にあるものを発見して、思わず声を上げる。

「まあ、ディアナ様はティーンの小説をお持ちなのですね」

ティーンは有名な恋愛小説家だ。正体不明の**覆面作家**で、年齢はおろか性別すらも明かされていない。ただその作風から、読者の間では二十代の女性ではないかと噂されている。

貴族の女性の間でも評判で、もちろん私も愛読している。ディアナ様もティーンの小説を読んでいるのだと思うと、なんだか急に親近感がわいた。

「ええ。レナ様もお読みになるのですか？」

「読みますわ。私は『扉の中の世界』が一番好きです。ディアナ様は？」

「まあ、私もその作品は何度も読み返すほど好きですわ。でも、一番は『薔薇姫』ですの。主人公のローズが好きなのですわ」

「私もローズは好きですわ。あの気品ある振る舞いには憧れますわよね。それに親友であるカーヴ

イナへの思いには共感します」

ティーンの書く物語は、個性的で格好いい女性主人公が多い。私もそんな女性になりたいと思っているながら読んでいる。

「ですわよね。あんな女性になりたいものです」

「ディアナ様は、もうローズのような気品をお持ちではありませんか」

「それを言うなら、レナ様もですわ」

こんな風に好きなものの話をするのは楽しい。

話が弾んで、気づけばあつという間に時間が経っていた。

「もうこんな時間だわ。私はそろそろ失礼します。またお会いできれば嬉しいですわ」

そろそろお暇しようと立ち上がり、微笑みながらそう告げた。

「ええ、もちろん。またティーンの小説についてお話ししましようね」

ディアナ様も微笑んでそう言つた。

ディアナ様の部屋を辞し、自分の部屋に戻りながら、交わした会話を思い返す。今日話してみた限り、彼女は素晴らしい方だった。

どうして陛下は幼馴染で、心を許しているはずのディアナ様のもとに通わないのか。その謎は私の中ですますます大きくなつていた。

私がディアナ様とお茶をした翌日、新たな令嬢が後宮入りを果たした。

辺境の地を治めている男爵家の娘——エマーシェル・ブランシュ様。

彼女は後宮に入つてから、まずはディアナ様と私に挨拶の手紙を出したようだ。

面会を申し込む手紙が届いたその日、私は特に用事もなかつたのですぐに返事をした。

しばらくして、部屋の扉をノックする音が聞こえてくる。侍女が扉を開けると、可愛らしい令嬢が入ってきた。

「お初にお目にかかります、レナ・ミリアム様。私はエマーシェル・ブランシュと申します」

そう言つて、エマーシェル様は礼儀正しく頭を下げた。彼女は、地味な服を着た侍女を二人連れている。

エマーシェル様は背が低くて、可憐な女性だ。だが、所作がややぎこちなく、こういうことに慣れていないのが見て取れた。

濃い茶色の綺麗な髪を肩まで伸ばしており、目の色は髪よりも薄い茶色だ。可愛いけれど、あまり

り目立たないタイプだと思う。

「はじめまして、エマーシェル様。そちらにお座りくださいませ」

私は彼女に笑いかける。社交界に出ている時と同じ、貴族としての笑顔だ。

「失礼いたします」

エマーシェル様はそう言って、向かいの席に座った。

私の侍女たちが、お菓子と飲み物をテーブルの上に置いていく。  
実家から連れてきた侍女のうちの二人には、また情報収集に出てもらっている。だから、いまこの場にいる侍女は五人。お茶の用意をしていない侍女たちは、私の後ろに控えていた。

「まあ、おいしいですわ」

エマーシェル様はお茶を口に含んで、可憐な笑みを見せる。

それは、貴族が社交界で浮かべるような、作った笑みでは決してなかつた。心のままに笑つていい。そんな感じだ。

「これはなんというハーブティーですか？」

「カモミールティーですわ。私の領地で生産されているカモミールを使ったもので……」

私は顔に笑みを貼りつけたまま説明する。彼女が何気なく質問してきたことは、貴族であるなら知つておかなければならないことだつた。出されたものを味わい、それがなにかを言い当てるだけでも、相手に博識だという印象を与える。

けれどエマーシェル様は、そういうことを知らないように見えた。

「そうなんですね。おいしいですね」

エマーシェル様は微笑んでいる。素直なところは好感が持てるけれども、後宮でそんな風に振る舞つていては、すぐにいじめの的になつてしまふ。

後宮は女の園であり、陰険ないじめがよく起きた。気に食わない相手を後宮から排除しようと精神的に追いつめるのだ。下位の貴族の妃は特に、なにか起こすとすぐ目を付けられる。  
過去には心を病んでしまつた妃もいて、そういう場合は自ら願い出て後宮を去ることができる。  
「気に入つていただけてよかつたわ」

もしここが後宮でなければ、『人前で隙を見せてはいけませんわ』といつた忠告ぐらいはしたかもしれない。けれど、私はここでやるべきことがあるので、そういうことは口にしなかつた。

他愛のない話をした後、エマーシェル様は帰つていった。退室する時に、彼女がなにもないところでつまづいているのを見て、ここで生きていけるのだろうかとますます心配になつた。

そんな風に、後宮入りしてからの三日間はあつという間に過ぎていつた。

そして私はこの場所で、自分がやるべきこと——愛しい陛下の力になり、陛下が望む妃を正妃にするという目的のために、本格的に行動を開始するのであつた。

エマーシェル様と面会した次の日、私は自分の部屋で手紙を書いていた。今日は伯爵令嬢主催のお茶会がある。そのお茶会の前に、お兄様に手紙を書いておくべきだ。だからお兄様宛てではあるが、

家族全員に読んでもらうことを前提に書いている。私の家族は貴族として、それらの情報をきちんと活用してくれるだろう。

私は家族を信頼しているし、家族も私をミリアム侯爵家の一員として認めてくれている。だから私は様々な貴族の裏事情も知らされていた。

私は自分が侯爵令嬢レナ・ミリアムであることを……貴族であることを誇りに思っている。

女性に対して『俺が守るから、君はなにも知らなくていい』と言う男性も中にはいるだろう。そう言わされることに憧れる女性もいるはずだ。でも、私はそうではない。一人前の貴族として信頼され、家族として支え合えるほうがいい。

できればあの方を支えて、あの方と一緒に歩んでいける妻になりたい。陛下に恋心を抱いた当初はそう思っていた。だが、いまは違う。

私は侯爵令嬢だから、政治的なメリットのために正妃に選ばれるはあるかもしれない。けれど私は、陛下には愛する人と結ばれてほしいと思うから、そういう形で妻になるのは避けたい。

それに、妻にならなくても陛下のためにできることは沢山ある。とりあえず、いまの私にできることは、この手紙を書くことだ。

家のために書いていると言つたけど、一番はあの方のために書いている。

私の家族は、私が陛下を愛してやまないことを知つていてるから、この情報を上手く使って、あの方のためになることをしてくれるだろう。

「これを女官長に渡しててくれるかしら」

手紙を書き終えた私は、侍女にそう告げた。

後宮へ届く手紙も、後宮から送られる手紙も、全て中身を確認される。だから私の手紙には一工夫してあって、家族の様子を尋ねる普通の手紙にしか見えないようになつていて。けれど実際は、

後宮の内情が事細かに記されているのだ。

それは、私と家族と、幼い頃から共に育ってきた侍女たち以外には読み取れない。なぜなら、私と侍女たちで生み出した『ミリアム式暗号』で書かれているからだ。私が八歳の頃に、侍女たちと暗号があつたほうが便利だという話になつて作ったものである。

「レナ様、お茶会の準備をしましよう」

侍女の一人が女官長のもとへ向かつた後、カアラが私にそう言つた。

私はその言葉を聞いて、壁の時計に目をやる。手紙を書くのに思いのほか時間がかかってしまったようだ、お茶会の時間が迫っていた。

「そうね、もうそろそろ準備をしなければならないわ」

悔られないよう身なりを整えなくてはならない。そこに少しでも付け入られる隙があれば、面倒なことになる。

侍女たちが私の髪に櫛を通す。お母様譲りの金色の髪は私の自慢だ。

そうして侍女たちにされるがまま、身なりを整えてもらう。

「レナ様、お綺麗ですか」

「ええ。レナ様は誰よりも可愛らしいですわ」

「頑張ってください。レナ様」

「誰よりもレナ様が美しいですわ」

実家から連れてきた侍女たちが、嬉しそうに微笑みながら口々に言う。そんな四人についていけないのか、新しい侍女たちはぽかんとしていた。四人とも、私を過剰なほど褒めるから、他の人が聞いたら驚いて当然だ。

「じゃあ行きましょう」

私はその四人の侍女を連れて部屋から出た。向かう先は後宮の庭園だ。

色とりどりの花が咲く庭園には丸テーブルが置かれ、お茶の用意が整っていた。テーブルを囲うように数人の妃が座っている。その中で、ひときわ派手な妃がこちらを見て言った。

「ようこそおいでくださいました」

彼女は赤茶色の髪を腰まで伸ばしており、黄色い瞳からは、どこかキツイ印象を受けた。胸元の開いた赤いドレスが、大きな胸を強調している。

正直、その胸の大きさを羨ましく思った。小さいのが悪いとは言わないが、殿方には大きな胸を好む方が多いと聞いている。

髪から爪先まで美しく仕上げているその女性こそ、今回のお茶会の主催者であるベッカ・ドラニア様だ。

ドラニア伯爵家の次女で、正妃の座を狙つて諍いを起こしている伯爵令嬢のうちの一人である。もう一人の伯爵令嬢であるリアンカ・ルーメン様がその隣に座っている。

彼女たちは、本気で正妃の座を狙つているようだ。他の妃が少しでも陛下に近づこうとすると、あの手この手で嫌がらせしているらしい。気に入らない妃へのいじめも激しいそうで、後宮で起きている騒動のほとんどが彼女たちによるものだという。

このお茶会で彼女たちを牽制して、少しでもそういう嫌がらせがなくなるようにしたい。

「レナ様、どうぞおかけになつてください」

ベッカ様に促されて、私は席に着く。チエリたちは私の後ろに静かに控えた。